

寺内小春

いし
いし
奴

やつ



独立編



NHKテレビ・シナリオ



寺内小春

日本放送出版協会

寺内小春（てらうち・こはる）

昭和6年、京城生まれ。終戦後、一家で父方の故郷二本松に引き揚げ、福島県立安達高校を卒業。昭和42年、家事育児のかたわらシナリオ研究所に学び、主婦作家のスタートをきる。デビュー作は「知らない同志」（TBS）。主な作品には「華岡青洲の妻」（CBC）、「おていちゃん」「なっちゃんの写真館」「父からの贈りもの」「はね駒」（いずれもNHK）など。「イキのいい奴」で第5回向田邦子賞を受賞。

NHKテレビ・シナリオ

続イキのいい奴^{やつ} 独立編

定価 一、八〇〇円、

昭和六十三年五月三十一日 第一刷発行

著者 寺内小春

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一―一（〒150）

電話 〇三―四六四―七三二―

振替 東京一―四九七〇―

編集協力 天野隆子／岡本由紀子

印刷 三陽社／近代美術

製本 田中製本印刷

検印廃止

©1988 Koharu Terauchi Printed in Japan
ISBN 4-14-005136-1 C0393 Y1800E

（落丁本・乱丁本はお取り替えいたします）

続
イキの
いい
奴
独立編

1	新猿人類	5
2	鮎だけが知っている	32
3	涙の連絡船	56
4	奇行・尾行・親孝行	79
5	金難女難	103
6	辰巳鮎は不滅です	127
7	女ひとりで飲む酒は	151

8 永遠^{とわ}のにぎり
.....
175

9 両ほういいのは頬かぶり
.....
200

10 花も嵐も
.....
226

11 男のホンネ
.....
252

12 振れない袖^{そで}
.....
278

13 男ひとすじ
.....
302

圖
裝幀

牧
蟹江征治
進

新猿人類

辰巳鮎・店内

二人（昭和二十八年現在の親方——兵藤晋作（37）
と安男——平山安男（21））の手が、次々と色とり
どりの鮎を握っていく。

大きなおけに、美しくみごとに盛られた江戸前
鮎。

握る親方——。

握る安男——。

安男（五十六歳）の声「お久しぶりでございます。安男で
ございます。一年ぶりに、またこうして皆さまにお会
いできるようになりまして、こんなうれしいことはご
ざいやせん。どうぞまた、辰巳鮎をごひいきに……」

回想

安男の声「昭和二十五年、右も左もわからねえこのあつし
が、ここ柳橋の辰巳鮎に弟子入りして三年。親方には
それは厳しく仕込まれて……。その辺のいきさつ
は、前回ご覧の皆さまにはよくおわかりでございま
しょうが……」

弟子入りしたときの安男——。

正彦の出現——。

殴られ、どなられて仕込まれる安男——。
などのフラッシュが入って。

柳橋界隈

「昭和二十八年春」

柳橋のたたずまいは前回と変わりはないが、道行
く人々の表情や服装が、ずっと明るく豊かになっ
ている。

ことに、若い娘たちの生き生きとした足取りや笑
顔が目につく。

店頭に置いてある商品に「蛍光灯」や「電気冷蔵
庫」などの電化製品が出はじめている。

街のそこに見える映画のポスターも「シネマ
スコープ・聖衣」「禁じられた遊び」などの洋画、

「ひめゆりの塔」「十代の性典」などの邦画と、色とりどりに映画界の活況を見せている。

神楽坂はん子の歌うヘゲイシヤ・ワルツ……や、マンボヘババヴズマンボ……など、陽気な歌が街に流れて……。

安男の声「昭和二十八年、あっしもどうやら、親方といっしょに、お客さまの前で握らせていただけるようになりまして……そのころ、世の中はつてえと、それまで食うだけで精いっぱいだったのが、気がついてみれば、いつのまにか、アメリカやヨーロッパの、それまで知らなかった風が吹いてきている……日本人の暮らしにもようやく、ちょっぴりだけど、余裕ができてきた……そんな年でした。そしてわが辰巳鮎も……」

辰巳鮎・表

鮎屋の中で、何やら急に慌ただしい気配と声がしたかと思うと……ガラガラッ！と激しく戸が開き、若い男（ヒロシ）が、ボストンバッグをつかんで飛び出し、いちもくさんに走っていく。追って飛び出してくる安男。

安男「おいッ、ヒロシッ、待てッ！ ヒロシッ！」

ヒロシを追って韋駄天走りの安男。続いて飛び出してくる親方、仁王立ちになって安男にどなる。

親方（大音声）「安男ッ、そんなゴリラア逃がしとけ！ 追うんじゃねえッ、戻ってこいッ、ばかやろう！」

どなっておいてさっさと引込んでしまふ親方。騒ぎに、近所の人々も表に出てくる。

向かいの仕立屋からも、長谷川夫妻——悟（52）、玉代（45）とお針子たちが出てくる。

長谷川「またかい」

玉代「あの子もやっぱしだめだったのねえ」

長谷川「しょうがねえなァ……」

声「ちよいと、みんな、どうしたの？」

お針子（トミ子）「豆奴姐さん、こんにちは」

けいこ帰りの豆奴（25）。

豆奴「こんにちは……どうしたの……」

長谷川「また、ゴリラの脱走だ」

豆奴「え？」

玉代「ほら、三日前に親方んとこに弟子入りしたヒロシッて子、あの子が今逃げ出しちゃって」

豆奴「やっぱり！」

玉代「あの子は続くかもしれないって思っただけどねえ」

長谷川「この節々、我慢のきかねえゴリラばかり増えちまって……若い者を使う商売はこれからたいへんだよ」

玉代「(お針子たちに) ほらほら、あんたたちも仕事、仕事」

安男、戻ってくる。

がっくりしている。

豆奴「安男ちゃん、がんばって！」

安男「あ、どうも……(一同に) すんません、毎度お騒がせして」

玉代「あんたも毎度走ってんじゃ、たいへんだねえ」

長谷川「うちに泥棒が入ったときゃあ、追っかけんの頼むぜ安男ちゃん」

安男「まかせといてください」

豆奴「笑いごとじゃないわよ。もう一人誰かいてくれなきや安男ちゃんもたいへんよね」

玉代「このごろはお店に食べにくるお客も増えたしさア」
安男「(元氣に) いやあ、この店くらいあっし一人でも大丈夫です。ご心配なく！」

長谷川「よし！ 男はそうでなきゃ」
声「おや、何だい皆さん、おそろいで」

安男「菊田の親方」

菊田の親方(70)が、若い男——中岡謙助(23)と連れ立ってくる。

謙助、つんつるてんの学生服に、古い型の小型トランクを提げ、腰に手ぬぐいをぞろりとぶら下げ、肩にはブックバンドで縛った数冊の本を振り分け荷物にして……茫洋と歩いてくる。

豆奴「ま、大親方、お久しぶり」

菊田「どうも、ごぶさた」

長谷川「お変わりもなく」

玉代「何だか、若くなっただんじゃない？ 大親方。あやしい」

菊田「なあに言って……何か取り込みでも？」

安男「いえ、何も……さ、どうぞ」

菊田「(親指立てて) いるかい？」

安男「います。(辰巳鮎の戸を開けて) 親方ア、菊田の親方がお見えですよ……(菊田たちに) さ、入ってください」

菊田「ごめんよ。……(入りかけて振り返り、謙助に) こ

「こだよ。来な！」

謙助、のこのこ入りかけて……立ち止まる。

やおら腰から手ぬぐいを抜き取り、入り口の戸にはあつと息を吹きかけ、手ぬぐいでキュッキュッとふき、ついでに安男の手を取って、キュッキュッとふき……何事もなかったように店の中へ入っていく。

あつけにとられて立っていた安男も急いで中へ。顔を見合わす長谷川、玉代、豆奴。

豆奴「何？ あれ」

長谷川「？……」

玉代「？……」

同・店内

つけ台の前に、菊田の親方と謙助、つけ場の中の親方。（安男は、茶を出した後、仕込みを続けながら話を聞いたり、謙助を観察したり……）

菊田「とにかくさ、本人が何でも鮎屋になってえってんだから、こりゃけっこうな話さね、そいじゃ俺んところ、もっと威勢のいいのに仕込んでもらったほうがよからうって……」

親方「ちよ、ちよと待っておくんさい。何が何でも鮎屋に……大学出てんでしよう？」

菊田「（謙助に）出てんだろ？」

謙助「中途で出てます」

菊田「何か小難しい学問やったんだよな」

謙助「哲学」

親方「テツ？ ああ、そりゃ、お門違えだ。鉄は鮎ダネにならねえ、歯が欠けちまう」

謙助「……」

親方「親方も何勘違えなすったんですか。しっかりしてくださいよ。鮎屋に鉄は関係なし！」

菊田「鉄火巻きつてのがあるじゃねえか」

謙助「（胴間声で）アハハ」

むつとなる親方、安男もにらむ。

親方「とにかく、餅は餅屋、鉄は鉄屋……そうだ、この先の二丁目に知り合いの鉄工場があるから、何ならこれから、あつしもいっしょに行つて……」

菊田「お前もわからねえ奴だな、だから言つてっだろ?! 鉄もコンニャクもねえ、とにかく何が何でも鮎屋になりてえんだって、この……この……名前、何てんだっけ？」

謙助「けんすけ、中岡謙助」

菊田「この謙助がそう言ってるんだって」

親方「大学まで行って何で鮎屋に……」

謙助「鮎の実存じうぜんを僕は探究したい」

親方「へ？」

謙助「鮎の存在と無について、僕の思考を実地的に検証し

てみたいゆえに、僕自身の存在と意識を……」

親方「(菊田に) 親方、親方、ちょっと……安男ッ、お前、

しばらくここ頼むわ」

安男「(仰天) 頼むわって、そんなあつしが何を……」

親方「何をやるかは手前てまえで考えろ。いつまでも俺を頼りに

するな！ すみません親方、ちょっと……」

菊田の親方を手招きして、そそくさと二階に上が

っていつてしまふ親方。

菊田「(行きながら安男に) ま、何か教えてやっというてく
んな」

菊田の親方も、二階へ。

安男「何かって……困りますよ、そんな……親方ッ、親方

ッ……もお……困っちゃうな、まったく」

謙助「そんなに困らないで」

安男「何ッ?」

むっと、振り返る安男。

謙助「(にっこりと) どうぞ、お構いなく」

安男「……」

同・二階

親方と菊田の親方。

親方「困りますよ親方。あんなへんてこりんなの連れてこ

ないでくださいよ。あんなのが職人になれるわきゃあ

ないっての、親方のほうで百も承知なんでしょう？

それを何であつしのとこに……だめって親方からはっ

きり言っやってくださいよ。申しわけないが、あつ

しはお断りします」

菊田「……」

親方「見込みのある奴なら、こつちも苦勞のしがいつても

んがあるけど、まったく見込みのねえ奴に手間暇かけ

るのは時間をもったいないすよ。だいたい大学出て、

妙な小りくつ並べる奴に、ちゃんとした鮎が握れるわ

きゃあないんだ」

菊田「どうして」

親方「どうして……」

菊田「大学出に鮎が握れねえって、誰が決めたんだ」

親方「いや、だって……」

菊田「おい、晋作、お前も年とったな」

親方「何言って……あつしゃあ、まだまだ……」

菊田「お前は、昔はそんな逃げは打たなかった。難しいことほど、真正面からぶつかってったじゃねえか」

親方「……」

菊田「見込みのある奴を仕込んで一丁前の職人にするのは誰にでもできるあたりまえのことだ。見込みのねえ奴を、いっちょうもんでやろうかってえ元氣はもうなくなっちゃったのかい？ え？ 晋作」

親方「……」

辰巳鮪・店内

つけ台の前に、お預けをくらった犬のようにちんと腰かけている謙助。

説得している安男。

安男「悪いことは言わないから、考え直したほうがいいって。あんたにはむりだから、絶対」

謙助「お構いなく」

安男「いや、俺ア構うよ。また追っかけて走らせられんのはたまねえもん」

謙助「……」

安男「ついさっきも、一人、逃げ出したんだから」

謙助「僕、逃げません」

安男「はじめから逃げるつもりで来る奴はいない……あ、俺はそうだった。鮪を食ったら逃げようと思って父親にくっついてきたら、鮪は食わされずにゲンコツくらっちゃってさ……」

回想——第一回

父親に口答えして、いきなり親方に殴られる安男。

親方に反抗して、また殴られる……。

辰巳鮪・店内

痛そうな顔をして聞いている謙助。

安男「とにかく、口で教えるより、ゲンコツでたたき込むんだから……あんた、大学で殴られたことなんかないだろう？」

謙助「大学ではありませんが……」

安男「な！ だから今のうちに鮪屋になるのはあきらめたほうがいいって。俺はあんたの事を思ってたん

だよ」

謙助「どうぞ、それはお構いなく」

安男「いや、お構いなくなつたつてね……」

謙助「何か仕事ありますか？」

安男「まだ弟子入りも決まつてないのに、仕事なんか、させられないよ」

謙助「じゃあ、掃除でもしてましよう。（立ち上がつて）

ここ、磨きますか？」

謙助、腰から手ぬぐいを引き抜き、つけ台のあたりをキュッキュとふきはじめる……顔色を変え
る安男。

安男「何すんだッ！ やめろッ！」

安男、夢中で駆け寄つて、謙助の手を押さえる。

謙助「どうぞ、お構いなく」

安男「構うよッ。よけいなことすんなよッ」

謙助「僕、きれいい好きなんです」

安男「何言つてんだ、ここのどこが汚いんだッ！ ここは、この家の中でいちばんきれいなところなんだぞ！」
謙助「ああそうすか？ そいじゃあ、いやがうえにもきれいに……（また、ふこうとする）」

安男「やめろッ」

謙助に飛びかかつて押さえつける安男。

安男「やめろつてんだッ」

謙助「おか……まい……な……くッ（安男を、すごい力で跳ねのけ……また、ふこうと……）」

安男、謙助のほおを打つ！

ピシャリ！

謙助「あいたア……」

ほおを押さえ、きょとんと安男を見る謙助。

謙助「何で？」

安男、謙助の手から手ぬぐいをひったくる。

安男「このつけ台は、鮎屋のいちばん大事な舞台だ。勝手なことは、俺がさせねえぞ！」

にらみつける安男——かっこいい！

ほんやり見ていた謙助——手を差し出す。

謙助「返して」

安男「え？」

謙助「手ぬぐい、返して、それ、僕の」

安男「（あわてて背中に隠し）だめだ！ 返したら、またその辺ふきまくるんだらう」
謙助「でも、それ、僕んだから」

謙助、いきなり安男に抱きついて、手ぬぐいを取

り戻そうとする。

させじと突き飛ばす安男。

「返して……返して……」としつこく抱きついてくる謙助。

安男「こ、の、やろう、しつこい……」

取っ組み合いになる。

二階から駆け下りてくる親方。

親方「何やってんだッ、こらッ……やめろ！」

二人を引き分けようとして、二人から跳ね飛ばされ、転がる親方。

親方「いてて……（怒る）何だ、お前ら！」

むきになって二人に組みついてゆく親方。

もう、わけわからずに逆上して暴れる安男、謙助。

三つどもえの大乱闘!!

同・表

正彦^{まひこ}（8）が、学校から帰ってくる。

戸を開け、

正彦「ただいまッ」

とたんに、どっと転がり出てくる男三人の塊^{かたまり}に、

跳ね飛ばされ、正彦も転がる。

正彦「何だよおッ、痛いじゃないかッ！」

取っ組み合っている男三人。

菊田「（中から飛び出してきて）やめろッ、やめろッ」

長谷川と玉代も、飛び出してくる。

長谷川「おい！ どうしたんだ！……やめろよ……おい

……」

と、駆け込んできた一人の女——中岡^{なかおか}くま（45）、修羅^{しゅら}場に、一瞬立ちすくむ……が、

くま「（金切り声の大音声）やめなさいッ！ やめなさあ

いッ！」

謙助の胸ぐらをつかんだ親方、びっくりして振り返る……そのほか、いきなり、パッチン！ とひっぱたかれ……。

くま「（にらみつけて）何すんのさ！ うちの子に！」

親方「……（ぼかんとして）……」

くま「離しなさいッ……手を離しなさいッ」

くま、親方の手を息子の胸ぐらから力まかせに引っぱがす。

親方「いてて……」

くま「いい年して、弱い者いじめて恥ずかしいのッ、

あんた！」

親方、あわてて安男をにらむ。

親方「見ろ！ お前のおかげで……ばかやろー！」

ボカリ！ と安男を殴る。

安男「いててッ……（謙助をにらむ）見ろ！」

ボカリ！ と謙助を殴る。

謙助「あいたァ……」

謙助に駆け寄り、飛び上がって頭をなでる、くま。

くま「大丈夫かい！ 大丈夫かい！」

謙助を後ろ手にかばい、一同をにらみつける、くま。

くま「寄ってたかってうちの子をどうしようってのさ！

お巡りさん呼んでくるよッ！」

一同、ぼう然……。

正彦、くまと謙助の母子を、息をのむように、じ

っと見つめている……。

玉代「ちよいと……ちよいと、あんた、おくまちゃんじ

やない？」

くま「え？」

玉代「浅川くま子さんじゃない？」

くま「くま子だけ……お宅は？」

玉代「やつぱりおくまちゃんねッ！ あたしよ、わからない

い？ ほら、昔、横山町のお針のお師匠さん（しやうしやう）のところで
いっしょだった玉代、玉代よッ」

くま「えッ、玉代って、蔵前の玉代ちゃん？」

玉代「そうよッ、その玉代ちゃんよッ」

くま「玉代ちゃん！」

玉代「おくまちゃん！……しばらく」

くま「懐かしいッ」

抱き合う玉代とくま。

一同、ぼかんと……。

突然、われに返ったように顔を上げるくま。

くま「玉代ちゃん、助けて。あたしを助けて」

玉代「え？ 助けてって、何を？……」

くま（謙助に取りすがる）この子がね……この子がどう

しても、お鮎屋になるって、そんなとんでもないこと

言い出したのよ……玉代ちゃん（涙声）この子に言

ってちょうだい、そんなばかなこと、おやめって。早

く目を覚まして、おつ母さんの言うことをお聞きつ

て、ね、この子を止めて！……（玉代の手をひっぱる）

ね、お願い、あたしを助けて……助けてちょうだい、

玉代ちゃん！」

玉代「おくまちゃん……」

一同、声なく……。

正彦、じっと、くまを見ている……。

辰巳鮎・店内

興奮しているくまを睨んで、ひしめいている一同——親方、安男、謙助、菊田、長谷川、玉代、正彦。

くま「息子が何と言おうと、あたしは絶対に許しませんから、どうかそのおつもりで」

謙助「母さん」

くま「謙ちゃん、あんたは黙ってなさい！ とにかくあたしは、この子を鮎屋にするためにきょうまで苦勞して育てたんじゃありませんから。……この子をむりしても大学にやったのは、ちゃんとした勤め人になって、まっとうな暮らしをしてほしいと思やこそ……」

菊田「（ぎょろりと）鮎屋は、まっとうな暮らしじゃないというわけでやすか？」

玉代「違うわよねッ。そんな深い意味で言ったんじゃないわよねッ、おくまちゃん」

くまをにらみつけている安男。

親方、腕組みをして、黙って、くまを見据えている。

玉代「（一同に、つくり笑顔で）この人ね、若いときからこうなの。悪気はないんだけど、つい口がすべっちゃうのよね」

長谷川「つい口がすべるってのは、つい本心がぼろっと出ちゃうってことなんだよ」

玉代「何よあんた、せっかくあたしがとりなしてるのに、またひっかき回すようなこと言わないでよ！」

長谷川「こういうときはね、下手なとりなしなんかしないで、はっきり本心を言ってもらったほうがわかりやすくていいんだよ」

玉代「だから、本心じゃないって言ってるでしょッ！ わかんない人ね」

長谷川「わかんねえのはそっちだろ！」

菊田「ちょいとお静かに願いてえね」

くま「とにかく、この子をお鮎屋にはさせませんから。」

……そんな、お客相手の食べ物商売！」

安男「（大声）それのどこが悪いんですか！」

くま「悪いとは言いませんけどね、人には向き不向きってものがあるでしょう？ 見てくださいよ。この顔でお